

武蔵野日曜講筵 特殊講筵

歎異抄と福音

1991年6月30日

小池辰雄

親鸞 六角堂に参籠 『歎異抄』序文 (第一条) 弥陀の誓願不思議 (第二条) 親鸞にをきてはたゞ念仏 (第三条) 善人なをもて往生 (第五条) 親鸞は父母の孝養 (第六条) (第七条) 念仏者は無礙の一道 (第八条) 念仏は行者のために (第九条) 念仏申し候えども

(序文) ひそかに愚案を廻らして、ほゞ古今を勘うるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思うに、幸に有縁の知識に依らずば、いかでか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟を以て他力の宗旨を乱ることなかれ。よつて故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留むる所、いささかこれを註す。ひとえに同心行者の不審を散ぜんがためなり。云々

〔ひそかに愚かな思いをめぐらせて、かつて親鸞聖人から教えて頂くことができたあの頃と、今日を考えてみますと、聖人から直接教えて頂いた他力真実の信心と、異なることが説かれているのは、なんと嘆かわしいことでしょうか。これでは聖人の教えを学ぶ後輩が、正しく学び、伝えるのに、疑いや惑いが生じかねません。幸いにも正しい仏教の先生におあいし、導きを受けなければ、どうして真実の仏教の教えを学び、阿弥陀仏の救いにあることができるでしょうか。決して、自分の考えで、真実の仏教の教えを乱してはならないのです。そこで、今は亡き親鸞聖人がよく語って下された、耳の底に残る忘れない御言葉を少しでも書き残しておきたいと思います。これはひとえに親鸞聖人の教えを学び求める同志の不審をはらしたいからなのです。〕

(第一条) 弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつ心のおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。……ただ信心を要とすと知るべし。……念仏にまさるべき善なきがゆえに、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに、と云々。

〔「すべての人を救う」という、阿弥陀仏の不思議なお約束に助けられ、いつ死んでも極楽往き間違いないの身となつて、お礼の念仏称えようと思いたつ心のおきた時、おさめとつて捨てられない、絶対の幸福に生かされたのです。……阿弥陀仏の救いには、年老いた人も、若い人も、善人も、悪人も、一切の差別はありません。ただ、真実の信心一つで救われるのです。……この世で阿弥陀仏の本願に救い摂られたならば、往生の一段においては、一切の善は無用となります。阿弥陀仏から頂いた念仏以上の善はないからです。また、どん



な悪を犯しても、死んだら地獄へ堕ちるのではなからうかという不安やおそれはまったくなくなりません。阿弥陀仏の本願で助からない悪はないからです」

〔第二条〕……親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀に助けられまいらずべしと、よき人の仰せを被りて信ずるほかに、別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、また地獄に墮つる業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり。たとい法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄に墮ちたりとも、さらに後悔すべからず候。……いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定のすみかぞかし。弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈、虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せ、そらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申す旨、またもつてむなしかるべからず候か。詮ずるところ、愚身が信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、面々の御計らいなり、と云々。

〔親鸞はただ、「本願を信じ念仏して、弥陀に救われなされ」と教えるよき人・法然上人の仰せにしたがい、信ずるほかに、何もないのだ。念仏は地獄へ行く悪い言葉という者があろうのだが、そういうことなのか、それとも20年間教えてきたように、極楽へ往くたねか、今さらこの親鸞に、言わせるおつもりか。まつたくもつて親鸞の知るところではない。たとえ法然上人にだまされて地獄に墮ちても、親鸞何の後悔もないのだ。……だが、微塵の善もできない親鸞は、地獄のほかに行き場がないのである。ああ、弥陀の本願まことだった。弥陀の本願まことだから、唯その本願を説かれた、釈尊の教えにウソがあるはずはない。釈迦の説法がまことならば、そのまま説かれた、善導大師の御釈に偽りがあるはずがなからう。善導の御釈がまことならば、そのまま教えられた、法然上人の仰せにウソ偽りがあるはずがないではないか。法然の仰せがまことならば、そのまま伝える親鸞の言うことも、そらごととは言えぬのではなからうか。いくら言っても親鸞の信心、このほか何もござらぬ。この上は念仏を捨てようと、親鸞に同心して、念仏を信じたてまつらうとも、おのががたの、勝手になさるがよからう、と聖人は仰せになりました。〕

〔第三条〕善人なをもつて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや。……他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。……

〔善人でさえ救われるのだから、悪人はなおさら救われる。……阿弥陀仏のお力によって、自惚れをはぎとられ、醜い自己を百%照らし抜かれた人こそが、この世から永遠の幸福に生かされ、死んで極楽へ往くことができるのです。〕

〔第五条〕親鸞は、父母の孝養のためとて念仏、一返にても申したることいまだ候わず。そのゆえは、一切の有情は皆もつて世々生々の父母兄弟なり。……有縁を度すべきなり、と云々。



〔この親鸞は、亡き父母の追善供養のために、念仏いつぱんたりとも称えたことは、いまだかつてないのです。なぜなら、すべての生きとし生けるものは、みな、生まれ変わりを繰り返す中で、いつの世か、父母兄弟であつたことでしょう。……ただ、自力をすてて阿弥陀仏の本願に救われ、仏のさとりを開けば、迷いの世界でどんな苦しみにも沈んでも、仏の方便によつてご縁のある人を救うことができるでしょうと〕

(第六条) 専修念仏せんじゆの輩ともがらの、わが弟子、ひとの弟子という相論そうろんの候らんこと、もつてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたず候そうろう。そのゆえは、わが計らいにて、ひとに念仏を申させ候わばこそ、弟子にても候わめ、ひとえに弥陀の御もよおしにあずかりて念仏申し候人を、わが弟子と申すこと、極めたる荒涼くわうりやうのことなり。……

〔阿弥陀仏の救いを聞かせていたただいている人の、「あの人は私の弟子だ、あの人は人の弟子だ」という争いは、もつてのほかのあやまりです。この親鸞は、一人の弟子もありません。なぜなら、私が教えてみなさんが阿弥陀仏に救われたのなら、私の弟子ともいえるかもしれません。しかし、みなさんが仏法を聞き始められたのも、求められたのも、阿弥陀仏に救われたのも、まったく阿弥陀仏のお力によつてなのですから、そんな人を「私の弟子だ」などというのはとんでもない傲慢なことです。〕

(第七条) 念仏者は無礙むげの一道なり。……

〔阿弥陀仏に救われた人は一切がさわりとならない無碍の一道という世界に出ます。〕

(第八条) 念仏は行者のために非行・非善ひぜんなり。わが計らいにて行ずるにあらざれば非行という、わが計らいにてつくる善にもあらざれば非善という。ひとえに他力にして自力を離れたるゆえに、行者のためには非行・非善なり、と云々。

〔念仏は、阿弥陀仏に救われて人生の目的を完成した人にとって、行でもなければ善でもない。阿弥陀仏に救われたならば、自分の力で後生の一大事助かろうとして称えるのではないから、私の行でもないし、私の善でもない。ひとえに阿弥陀仏のお力で称えさせられる他力の念仏であつて、自力を離れているのだから、阿弥陀仏に救われた人にとっては、行でも、善でもないのです、とおっしゃいました。〕

(第九条) 念仏申し候えども、踊躍ゆやく歡喜くわんぎの心おろそかに候こと、またいそぎ浄土へ参りたき心の候わぬは、いかにと候べきことにて候やらんと申しいれて候いしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円坊ゆいえんぼう、同じ心にてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思いたまうべきなり。……他力の悲願は、かくのごときの我らがためなりけりと知られて、いよいよ頼もしく覚ゆるなり。…

〔念仏称えても、喜ぶ心がおきません。また、はやく極樂へいきたいという心ありません。〕

どうしてでしょうか」と親鸞聖人にお尋ねしましたところ、「親鸞もこの心、疑問に思っていたのだが、唯円房おまえもか。よくよく考えてみれば、天におどり地におどるほどに喜ばねばならないことを、喜ばないところが、いよいよいつ死んでも極楽参り間違いないと思わずにおれないのだ。……しかるに阿弥陀仏は、百もご承知で、煩惱具足の凡夫を助けると仰せられのだから、他力の悲願は、このような私たちのためであつたと知らされて、いよいよ頼もしく、喜ばずにおれないのだ。」

（第一四条） 一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしということ。……一念発起するとき、金剛の信心をたまわりぬれば、……

「一回の念仏で、八十億劫という気の遠くなる長期間、私たちが造つた重い罪が消えて、極楽へ往けると信じなさい」という邪偽について。……なぜならば、阿弥陀仏の光明に攝取され、一念で何があつても変わらない、金剛の信心を頂けば、生きているときに、いつ死んでも極楽行き間違いないしの正定聚の位に定まつてしまいますから、死ねば必ず極楽へ往生して弥陀同体のさとりを得られます。念仏を称えようと称えまいと、救われた後の念仏は、往生には何の関係ありませんから、一声の念仏で八十億劫の罪が消えることが問題にならなくなります。」

（結文） ……聖人のつねの仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれ

ば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。……

〔親鸞聖人がいつも「大変長い間、阿弥陀仏が考えに考え抜かれ建てられた本願をよくよく思い知らされてみれば、全く親鸞一人を助けんがための本願であつた。こんな数限りもない悪業をもつた極悪の親鸞を助けて下された阿弥陀仏の本願の尊さよ、ありがたさよ。」と述懐しておられた〕

●親鸞

親鸞は、承安3年（1173年）の春に、京都の東南のあたりの所（山城国）に生まれました。ところが、生まれる前に不思議な事があつた。これはよく本に書いてあります。お母さんの名前は吉光女といひます。

大体、女性は、実は歴史をつくるんで、女性の魂が非常に大事です。偉い人のお母さんは、みんな魂の質がいい。

これも、非常によく仏道に精進して、素晴らしく信心の厚い女の方ですが、高倉天皇の承安2年の5月2日の夜、西の方を向いて寝ていたら、夢の中に——いわゆる「夢告」です——金色の光がグッと近づいてきた。そして、その光が自分の身の周りを三度回りました。そして、アッと驚いて口を開けたら、その光がパッと口の中に入つて、お腹の中に入ってしまった。

そして、また西の方を見ると、そこに一人の菩薩が立っている。その人は一尺ほどの木の枝を持っていた。その木は五葉の松です。五葉の松の枝を持っていた。そして、それを



吉光女に渡して言うのに、

「我はこれ如意輪観音なり。汝、奇異の子を生まん」

と。変わった子を生む、ちよつと並でない子を生むぞと。そう言つて消えた。そういう夢を見た。ご主人に語つたら、驚いた。

どうも、特別な人は、生まれの時にいろいろな事がありますね。聖徳太子がそうです。

ところで、系譜から言いますと、大変なんだ、親鸞の系譜は。アメノミナカマシノカミ天之御中主神の46代目の遠孫であるを書いてある。聖徳太子がその系譜の中に入っているわけです。聖徳太子は藤原という号をいただいたんですが、藤原家は即ち聖徳太子から始まっている。聖徳太子の後胤である。こういふ聖徳太子は自分の祖先なんです。だから、非常に親しみを感ずるわけなんだな。やがてそのことが出てきますけれども。そのお告げの人が、

「もし子が生まれたならば、その名前は松の木に因め^{ちな}」
と。それで、小さい時の名前は松若丸という。

ところが、また坊さんは、法然もそうですけれども、とかく父母が早く死んでしまうね。お母さんが先に亡くなって、お父さんもその後で亡くなってしまふ。それで、もう9歳の時には、彼にはお父さんもお母さんもない。大体、お釈迦さんは、始めからお母さんを知らないものな。産んだら死んでしまったからね。

それで、伯父さんの導きでもつて、九歳の親鸞が出家してしまう。そういう幻は、ヘタをすると、非常に災難に遭うということを、夫が言つたそうです。それでやつぱり、法難に遭つたね。楽しい幻では、あんまりなかった。しかし、法難に遭うくらいの方は、やはり選びの人です。大体、使徒たちもみんな十字架を負つた。

それで、修行のため比叡山にのぼつた。指導を受けたところの和尚さんは、慈円という。その頃の叡山の主流は、もちろん最澄、空海の方で、これは密教です。密教というのは、多少、自力的です。密教道。深く祈つて、祈りを深めて、そして、仏と一つになる。「即身成仏」が空海ですからね。それを一生懸命でやる。ところが、なかなかその境地に入れない。苦しい。親鸞は悩んだ。勉強は非常にしました。もう大蔵経をみんな読んでしまった。それでもしょうがない。それから、一般の坊さんたちの在り方が、決して感心した方ではない。

それで、ある意味で、外側も嫌になつたし、内側には自分の悩みがあるし、安心を得ない。それから、その当時は、親鸞が出家した時の少し前に、平清盛は死んでしまった。平家の最盛時代はもう下り坂になっている。とにかく、源平の争いの時代で、僧兵もいるし、なんのかんのと、いろんな意味で乱れた世の中だった。天変地異もなんのかんのとあつた。非常に紛糾の世の中だった。

●六角堂に参籠

それから、下りてきて——聖徳太子が建てた六角堂というのがある——その六角堂に百



日をかけて参籠を始めた。ところが、95日目に、不思議な夢告が来た。これが、建仁元年（1201）4月5日の夜、寅の刻に、救世菩薩——聖徳太子のこと——が現れて、次のように言った。

「行者宿報設女犯」

我成玉女身被犯

一生之間能莊嚴

臨終引導生極樂

「行者宿報ニテ設ヒ女犯ストモ」

我ハ玉女ノ身ト成リテ犯セ被レム

一生ノ間、能ク莊嚴シテ

臨終ニ引導シテ極樂ニ生ゼシメム」

（行者がこれまでの因縁によって、たとい女犯（女性と肉体の交わりをすること）があつても、わたし（観音）が玉女の身となつて肉体の交わりをうけよう、一生の間、能く莊嚴（永遠化すること）して、その死にさいして、引き導いて極樂に生ぜさせよう）

親鸞の魂は、究極の所にいかないで、非常に苦しんでいた。また、彼の心は、非常に情の深い人です。まあ、非常に平たい言葉でいうと、性欲の強い人です。その苦しみもあった。それで、一生懸命で何とかそこから脱しようと思つた。まあ、しかし、普通の坊さん達は、妻帯しませんけれども、尼さんという加減なことをしたことは事実です。これは、カトリックの歴史でもそうです。

ところが、そういうゴマかしは、親鸞はできない。坊さんは、表向きは、とにかく妻帯しないことになつていたからね。表向きどころじゃない、本当の意味で、そういった独身を貫くことができるかという、親鸞はできないんだ、なかなか。それで、一生懸命で祈つたら、

「行者宿報設女犯」

行者——今、修行しているお前さんだ、親鸞のことを行者といった——宿報というのは、行者の宿縁、生まれつき持つているところの縁だね——宿縁は女犯を設けることになつてゐる。「女犯」というのは、女性と交わることです。犯すといったって、不義な事をするという意味じゃない。妻帯のことなんです。

「女犯を設けられていることがお前の宿縁だ。そんな独りで居なくたっていい」というわけです。

「我成玉女身被犯」

「私はお前の願いに対して、玉のような女として成る。そして、私の身は犯すを受ける。即ち、奥さんとして交わる」

と。だから、小野の小町みたいだな。



「一生の間能莊嚴」

一生の間、よく、莊嚴——莊嚴というのは、非常に立派に妻としての勤めを果たす、ということ。これは、恵信尼がそうなんだ。この示しの相手は、要するに、恵信尼です。これは親鸞の奥さんになった。

マルティン・ルターが、あの当時も——今でもカトリックは、神父は奥さんを持たないのが常道なんだけれども——ルターは、修道尼を逃亡させて、その一人と結婚してしまっただでしょ。あれと似ている。信仰の世界は、神さまちゃんと男女に造ったので、何も独りでいることが、ただ潔いとか潔くないとか、そんなことではないと。キリストは祝福していらつしやるんだからね。

だから、「玉女」とは実際は恵信尼のことになるわけです。

「臨終引導生極楽」

「一生の間、よく仕える。臨終にあたつては、引導を渡して、そして極楽に往生するようになるぞ」

と。親鸞はこれを受けとつて、えらく喜んじやった。

「そういうことですか。それで安心しました」

と。何もやせがまんしなくてよろしいと。

それで親鸞はおしまいかというと、そうじゃない。これは、身体の方の、心の方の問題が解決した。今度は、魂の問題で解決しない。魂の問題で本当の悟りの世界というか、そこには入れない。そこで、誰に一体これを尋ねたらいいかというと、偶然に或る人の言によつて、

「では、貴方は吉水の法然の所へ行きなさい。そうしたらば、きつと何か……」

と言われて、また法然の所へ一生懸命で通う。これが百日。道を遠しとせずしてね。吉水に行つて、法然に承る。そして始めて、他力本願の道に入るわけです。密教や禅宗は自力的です。ところが、この法然が開いたのが、他力の世界。他力本願です。そして、親鸞は法然以上の世界に入る。

それが、今日、大いに我々が学ばなければならぬところなんです。そこで『歎異抄』にぶつかってみましょう。もう皆さんはお読みで大体お分かりかと思いますが。大事なことだけ。

私は『歎異抄』の独訳も持っています。独訳を読むと、かえって分かりやすいくらいだ。有名な大神学者のバルトが歎異抄を、もちろん独訳で見たんだが、

「こんな素晴らしい信仰があるのか」

といつてびっくりした。バルトはあの『ドグマテイク』という大きな本の脚注の所にそれを書いています。私は読みました。



●『歎異抄』序文

『歎異抄』の序文に、

(序文) ひそかに愚案を廻らして、ほゞ古今を勘うるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、

と書いてある。異なることを歎く。だから、「歎異」という言葉なんだ。ところが、私に言わせると、今のキリスト教は、正に、この歎異抄を我々が書かなければ。私の書いたものは歎異抄なんです、

「いや、元のキリストの直弟子の次元に戻れ」と。

後学相続の疑惑あることを思うに、幸に有縁の知識に依らずば、いかでか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟を以て他力の宗旨を乱ることなかれ。よつて故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留むる所、いささかこれを註す。ひとえに同心行者の不審を散ぜんがためなり。云々

後の人たちが相続して、いろんな疑いを生ずることを思う。縁の有るところの「知識」——その道に非常に優れた人のことを「知識」という——によらずば、いかでか本願の易行の一門に入らなことをえんや。「覚悟」とは、自分の主観的な見解のことです。「他力の宗旨」とは、他力本願の本質。「御物語」とは、我々に語ってくれたこと。同じ信仰の行者がいろいろ問題にしているものを全部、これを読めば、疑問はみな解けてしまう、ということ。

●(第一条) 弥陀の誓願不思議

(第一条) 弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつ心のおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。

「誓願」とは、本願のことです。「弥陀」は「阿弥陀」の略です。本当は、「阿」は略したらいけないんだ。「阿」は否定の字ですからね。サンスクリット語でも、ギリシヤ語でも。

「ア・ミッタユー」は「無量寿」、永遠の生命。「アー」は量が「無い」。この「無い」は、否定して、「とても数えられない」という意味です。

「ア・ミッタバー」というのは、永遠の光、「無量光」。キリストのことですよ、要するにね。如来のことだけれども、キリストは正に「アミダユー、アミダバー」なんだ。

その覚者、それを悟り持った人に、「南無」する、帰依する。これが

「南無阿弥陀仏」

だね。念仏すれば往生する、必ず往きて生きる。死なないでいる。死の向こうでもって本当に生きる。本当の永遠の生命の中に入っていく。

「往生」



とはいい言葉だね。往きて生きる。本当の後生願いだ。念仏すればね、仏を念ずれば。ところが、福音の世界は、往生よりか前に、「今生^{こんじょう}」だ。今生きている。私たちの祈りの世界は今生の世界。今、現に、永遠の生命の中にいる。

「我を信する者は、永遠の生命に、死ぬとも死なない」

と。現に生きている。今生の世界。だから、

たゞ信心を要とすとしるべし。

大事なのは信心だけだと。それで、

念仏にまさるべき善なきゆえに。

念仏以上の善きことはない。

悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに、と云々。

悪も何も恐がることはないんだと。弥陀の本願は力を持っていますよ。単なる願望じゃないですから。弥陀が、如来の本願は力をもつてやってくるから。だから、こっち側がどうであろうと問題じゃない。いわゆる相対的な善悪じゃないと。だから、

「悪をもおそれることはない。躓いたり転んだりしたつてくよくよするな。本願の力がみんなそいつを乗り越えさせてくれる。だから、念仏ほどこいことではない」

と。仏を念ずること。我々でいうと、

「祈り入る」

ことです。主に祈り入ることにまさることはない。この聖霊の世界だと、祈り入ると、その中に入ってしまったて、

「エン・クリスト」（クリストの中に）

になってしまふから、だから、今生の世界。親鸞がもし、我々のこの福音の世界、キリストの直弟子の福音の世界を聞いたら、

「いや、私は今度は、福音の世界に入ろう。仏さんはやめた」

なんて、親鸞は言うかも知れない。けれども、親鸞の信仰の質は、これで終わるわけじゃないですよ。

●（第二条）親鸞にをきてはたゞ念仏

（第一条）……親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀に助けられまいらすべし

と、よき人の仰せを被りて信するほかに、別の子細^{しさい}なきなり。

「よき人」というのは法然のこと。

「念仏して助けられると、法然がそう言ったから、無条件に私はそれを受けとる」

と。キリストの弟子たちが無条件にキリストを受けとりましたね、「はいっ」と言つて。親鸞は法然を信ずることが、100%なんだ。



念仏は、まことに浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、また地獄に墮つる業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり。

「念仏して、浄土に往くか、或は地獄へ往くか、どっちでもいいよ」

という。そこらがまた親鸞の素晴らしいところです。天国であろうと地獄であろうと、大事なのは念仏だけだ、本願の言うとおりになると。

だから、絶対に御利益教じゃないです。自分の救いのためでもない。念仏は、もちろん、結果が救いになるけれども、ただ救いを主題として言っているのではない。

「地獄に落ちたつて結構です、もともと地獄の人間だから」

なんて後の方で書いてある。パウロの言った、

「罪びとの首」

みたいなことを言っている。だから、「子細ない。総じてもつて知りません」と。

たとい法然聖人にすかさされまいらせて、念仏して地獄に墮ちたりとも、さら
に後悔すべからず候。

「法然を信じたら、法然のように念仏したら、私は地獄へ行つたとしても、ひとつも後悔しない」

という。これだけ先生を絶対信頼して、そして動いているような親鸞というのは、凄い魂だね。師弟関係もそこまで行つたら、もう極致だね。しかも、法然の言うことは結局、さかのぼるといって、お釈迦さんの言つたことになるんだと。だから、

「お釈迦さんが地獄へ行けと言つたら行きますよ」

というわけだ。ヨブが、

「自分は地獄に落ちても、陰府に落ちても、神さまにしがみつく」

と言つた。まあ、あの辺はまだそういった「しがみつki」のところがありますけれども、これは、しがみつkiもしないんだ。ああ結構でございますと。

いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定のすみかぞかし。

どんな行いをして、とてもおよびがたい。俺はダメなんだ、地獄はもう決まつたすみかだ、落ちたつて当たり前のはなしだと。

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈、虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せ、そらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申す旨、またもつてむなしかるべからず候か。詮ずるところ、愚身が信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんとも、面々の御計らいなり、と云々。

「愚身」とは自分のこと。

「信心は、もともと向こうからやつて来ているんだから、地獄に落ちたつて一向に



差し支えない。捨てられたって、一向に差し支えない。念仏というものは、ただ救いを求めている念仏ではなかった。ただ本願にこれ従うだけだ」

と。そういう意味において、

「御意を成させ給え」

というキリストのあの言と、非常に質的には同じなんです。だから、キリストは十字架にかかつてしまった。とにかく、

「神の御意が成ることが自分の一切である」

と。いわゆる幸福でも何でもない。幸せでも何でもない。「幸いなるかな」という言葉があるけれどもね。極まるところは、この角度が非常に大事なわけです。

●(第三条) 善人なをもて往生

(第二条) 善人なをもつて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや。

善人が念仏すれば往生をとげるのに、いわんや、悪人においてをや。

「我は罪びとを招かんとて来たり」

と、キリストが言われた。

「善き者は要らない。パリサイは結構だ。お前たち、自分を義人だと思っているのは勝手にしろ」

と。ところが、本当の義人はいない。自分をダメだと思う奴ほど、本当の世界に入っていく。ダメだと言って絶望したらダメだ。そいつは一番ダメなんだ。

「ダメだから、いよいよ本願に依ります、その本願によつて、たとえば地獄に落ちても、それはもう仕方がない」

とこういう角度なんです。ところが、

「善人が救われたら、いわんや悪人はもう。本願はどん底を救うためにある本願であるから」

と。だから、この救いの世界は、決して単なる論理では分らない。一面は、

「地獄へ行つていい」

と、しかしながら、

「悪人は必ず救われていくんだ」

と。そういう矛盾構造の表現が本当の世界なんです。

けれども、大事なことは、いつも本願が主体で、人間は客体なんです。エラスムスが人間を主にして自由意志論を言った。ルターは、

「そつじやない、人間は奴隷なんだ」

と、奴隷意志論を言った。神さまの言いなりになるのが本当の意志の、汝の御意が人間に成っているという。自由意志論では、御意が成らないです、人間を主にしたら。人間の相



対的な世界では、エラスムスの言うことは、いわゆる道徳哲学の世界は、人間が主で、自由でいいけれども。そんな自由はまだ次元の低い自由だ。

「本当の自由は、自分の自由を捨てていてところの、本当の奴隷となっていてところに、上から来るところの力が、この世界が本当の自由の世界だ」

と。これが『クリスチャンの自由』の、あの言葉です。だから、『クリスチャンの自由』と、こちらの『歎異抄』は双璧だと、私は言ったでしょ。ある意味においては、歎異抄の方が上です。

他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。

往生するところのまことの原因、その往生の正因は、こちらが悪人である、ダメな奴、罪びとであること。罪びとであるから、往生の正因であると。これはもう、パウロが、

「我は罪びとの首」

と言ったでしょ。「私は罪びとの首、私は罪びとのどん底だ」と言ったパウロはもの凄くキリストの中に入って、最大の使徒になった。内村先生が、

「自分もそうだから、私が救われたんだから誰だって救われる」

と、本当に彼はそう言ったです、戦場ヶ原の会話の中で。

●(第五条) 親鸞は父母の孝養

(第五条) 親鸞は、父母の孝養のためとて念仏、一返にても申したること
いまだ候わず。

そりやそうだよ。親鸞は、念仏する頃にはもうお父さんもお母さんも地上には居ないんだから。けれども、天界の、向こうの世界のお父さんとお母さんのためにも念仏しない、と。「しない」というのは、ただしなみ、という意味じゃない。

そのゆえは、一切の有情は皆もつて世々生々々々父母兄弟なり。

キリストが、

「神の御意を為す者はすべて兄弟姉妹だ」

と言ったでしょ。あれと同じ角度です。だから、誰でもが兄弟姉妹です。私たちが

「兄弟姉妹」

というのはそのことだからね。地上のいろいろな人間関係というのは、相対的な関係はあるさ。けれども、この福音の世界では、それが妻であるとか夫であろうと何であろうと、みなお互いに兄弟姉妹だ。これは福音の世界の次元の表現ですからね。キリストを主としたところの兄弟姉妹。だから、そういうことを親鸞も言っているんです。そのためにはいくらかでも念仏する。そして、

有縁を度すべきなり、と云々。

と。そういうった、みなお互いに縁があるから、そのために救いのことをやることを、「度す」



という。

●(第六条) 親鸞は弟子一人ももたず候

(第六条) 専修念仏の輩せんじゆともがらの、わが弟子、ひとの弟子という相論そうろんの候らんこと、もつてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたず候そうろう。

「いや、誰の弟子だ」と、無教会ではしゅっちゅうやっているよ、

「何々先生の弟子だ、ああだこうだ」

と。そして何か、別な目で見ているような。そんなことではダメです。教会であろうと、無教会であろうと、召団であろうと、原始福音であろうと、何だつて構やしない。そんな事を何故言うかと。パウロも言っているでしょ、

「キリストだけだ。お互いにゴタゴタ、誰の弟子だ、どうだこうだなんて、そんなことじゃないぞ」

と。ルターも、

「ルター派なんてものをつくるな」

と、彼自身が言っているんです。ところが、ルター派というのがある。

だから、「親鸞には一人も弟子はいない」と。

そのゆえは、わが計らいにて、ひとに念仏を申させ候わばこそ、弟子にても候わめ、ひとえに弥陀の御もおしにあずかりて念仏申し候人を、わが弟子と申すこと、極めたる荒涼くわうりやうのことなり。

自分が自分のはからいで、「さあやれ」と言ったら、それは弟子かも知れないけれども、如来が、弥陀の「御もおし」によつて——これが大事なんだ——上からの御もおしによつて、その世界に入つた者を、何故、弟子なんかと言えるか、と。

それは、御もおしの取次ぎをするようなことはありませんよ。だけれども、本当は、ただ取次ぎは取次ぎだけれども、本当に救われるところは、直線の世界だからね。私は皆さんのお取次ぎはしてます。けれども、神・キリストと直結している世界、この世界が大事なんで、この世界があれば、弟子の弟子でないのと、そんなことを言う必要はないんだ、と。親鸞の気持はそれなんです。だから、

「弟子は一人もいない。ただきつかけになつたから、お前は私の弟子だよ、そんなことは言いたくない」

と。こういうことなんです。だから、私は皆さんと兄弟姉妹で、この集會に来ようが、出て行こうが、入ろうが、そんなことは一向に差し支えない、とやっているでしょ。教会の牧師みたいに、さあ出て行つた、どうだこうだ、とそんなことは言わない。

「出て行きたい人は、どうぞ出て行つてください。入りたい人は入ってください。私はただ福音を語っているだけだ」



と。それが私の本質なんだから。ところが、本ものにぶつかると、皆さんが一緒に本ものになって進んで行くから、これは切ることでできないような本当の交わりになる。これが、

「親鸞は一人も弟子を持たず」

という彼の気持です。

●(第七条) 念仏者は無礙の一道

それから大事な言葉が、

(第七条) 念仏者は無礙の一道なり。

という言葉。「念仏は」というのは「念仏者」と書いてある。「者」というのは、「は」という、ただ「もの」というふうに読まないときがあるね。念仏は、どんな事が礙さまたげるようにみえても、実は礙さまたげにならない、ということ。だから「無礙の一道なり」という。それほど念仏というのは強いんだと。この、

「念仏は無礙の一道」

というときの「念仏」が、我々の側のただ祈りというような意味だったら、ダメなんです、この「念仏」は。念仏それ自身が、実は弥陀に念仏せしめられている。この受け身。このことは、法然よりも親鸞の方が深いところに入っている。だから、法然は一生懸命に

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、……」

と何回もやっているでしょ。何回もやる必要はないんだ。上から来ているんだから、念仏は。ただ一回で結構なんです。

上から来ているところの念仏は、念仏させられているから、力が強い。祈らされている。我々は「祈り入る」と言うけれども、

「祈り入らしめられている」

んですよ、本当は。いいですか。

「自分はなかなか祈り入りません」

なんて言ってるね、一生懸命やったら、これは自力の世界になるんですよ。

本当の他力というのは、祈らせられて、祈らざるを得ない世界に入ります。キリストの愛、キリストの光、キリストの力、その贖い、これを受けとったら、もう祈らざるを得ないというのが、この念仏なんです。

「本願は本願によって本願がやってくるから、念仏せざるを得ない」

という念仏がこの念仏なんです。そういう念仏は無礙の一道だという。それは、どんな事にぶつかっても、絶対にそれでへこたれない。妨げのないところの一道である。その原因が自分にあるのが、身辺にあるのが、一向差し支えない。そんなことではないんだ、この本願の力は、念仏の力は。

これは、キリストの言葉が非常に躓きになる。



「汝の信仰、汝を救えり」

という言葉が。

「信仰うすき者よ」

なんて仰るからさ。

「弱ったな、まだ私はうすいから強くしなくてはいかん」

なんてやったら、くたびれてしまうよ。だから私は、

「絶信しろ、自分の信仰なんか捨てろ。上から信がくるぞ」

と言っている。圧倒されなければ本当の世界に入れないんです。福音は圧倒の世界ですから。

圧倒の愛ですから。

「神は愛なり」

なんてね、体裁のいいことを言ってもダメだよ。

「神の愛に、キリストの愛に圧倒されて生きています」

と言える、その境地にきたら、これは祈らざるを得ない。その祈りは力を持たざるを得ない。

みんな、

「ざるを得ない」

世界です。いいですね。この点は本当に普通のクリスチャンもダメなんです。

念仏させられている。祈らされている。ざるを得ない。この「ざるを得ない」世界が一

番本当の世界ですからね、天的必然の世界が。そこが本当の自由なんです。天的必然は本

当の自由なんです。これは妨げられない。妨げられないどころじゃない。

「いろんな事にでつくわせば、逆に聖霊の力は働くぞ」

と私は言っているでしょ。聖霊の力というのは、上から来ている念仏の力だよ。そこへい

くともう、キリストのこの御霊の世界は最高の素晴らしい世界なんです、具体的に。「本願」

の实体は、福音でいえば、「聖霊」なんです。

法然の祈りには、まだ、こちらからの角度が強かったが、親鸞は上からだ。そいつを受

けとる。それをまた徹底したのは、一遍上人です。キリストの光で見ると楽しいんです、

全部見えてくるから。

●(第八条) 念仏は行者のために

(第八条) 念仏は行者のために非行・非善なり。

これがそうです。「非行」、念仏は自分で念仏しているのではないから、非行なんです。「非

善」、ちつとも善くない。

「なぜ私を善いというか、神の他に善きものなし」

という、キリストのあの角度。

わが計らいにて行ずるにあらざれば非行という、



そうでしょ。

「自分のはからい、自分の思いでもって念仏しているのではない。だから、非行だ。上から念仏させられているんだ」と。

わが計らいにて行ずるにあらざれば非行という、わが計らいにてつくる善にもあらざれば非善という。ひとえに他力にして自力を離れたるゆえに、行者のためには非行・非善なり、と云々。

非常にはつきりしてます。

「本当の他力だ。こつちは完全に受け身だ。本当の受け身の世界が本当は、実は一番実力を持っている」

とこういうことです。

「ゼロ＝無限大」

の世界だ。

●(第九条) 念仏申し候えども

(第九条) 念仏申し候えども、踊躍^{ゆやくぐわんぎ}歡喜の心おろそかに候こと、またいそぎ

浄土へ参りたき心の候わぬは、いかにと候べきことにて候やらんと申しいれて候いしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円坊^{ゆいえんぼう}、同じ心にてありけり。

念仏すれば楽しくて踊りたくなる、というのが本当だ。上からの力だからね。ところが、「なかなかそうはいきませんが、これはどうしたことでしょう。どうも、しようがないんですよ、私はそこまでいきません」

と、唯円が言ったら、

よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思いたまうべきなり。

と、親鸞がそう言った。

「それはもう、嬉しくてしょうがないのが本当だけれども、そうでなくたって心配するな。そういう奴を本当は、本願はつかまえて救ってしまうんだ」

と、どこまでも本願の力を言っているわけだ。

「こちら側の信仰の実存の在り方でもって向こうは量ってはしないぞ。心配するな」
凄いいね、これ。だから、それを聞いて、今度また唯円は嬉しくなってしまった。

「まだ私はそこまで行きませんが」

「いつ行くなんて考えるな。もうそれでいいんだ」

と。そうしたら、本当の喜びがわいてくる、なるほどそうだと。

「自分の側の喜びの加減を考えているからダメだ。自分の側の信仰の加減を考えているからダメなんだ。自分の行いの考え、そんなものはダメだ。ただ一途に本願



だけを受けとって行け。そうしたら、みんなぶつとばしていくぞ」
と。え、楽しいね、これ。本当の福音の世界ですよ。

他力の悲願は、かくのごときの我らがためなりけりと知られて、いよいよ頼
もしく覚ゆるなり。

「いよいよたのもしくおぼえた」と書いてある。

「それは有難い、これは本当の他力だったなあ。こっち側の努力精進は何も要らな
かったなあ」

と。お釈迦さんが、

「一生懸命努力精進したがこれは無駄だった」

というのと同じことです。もし、努力精進ならば、上の力でもって努力せざるを得ない、
精進せざるを得ないならば、わかりますよ。それは、上からの力でやっているんだからね。
人間の現実というのは、そういった、単なる割り切れる世界じゃないから。この努力精進
が自力だったらダメです。

ロマンチックな願いでも、上から来ているところの光でもって願っているのならいいけ
れどもね、理想主義でも。こちらからの理想主義や、こちらからの浪漫主義じゃダメなん
です。全部上からのもの。

だから、太陽の光と同じだ。太陽の光で物が光っているし、見えてくる。全部、他力なんだ、
この自然界も。自然界は太陽が無くなったかどうかにもならないでしょ。我々は他力で生き
ているんだから、本当に。私たちの身体は、絶対他力で生きている。魂ばかりは、本当
に絶対他力の世界になぜ入らないか。簡単なんだ。そうしたら、力が湧いてくる。あなた
方がなさる事にも全部、もの凄いいものが展開していくから。

ああ、これは本当だ。私自身がもう90歳になろうという奴が、

「これから10年かかって詩を書く」

なんていうバカなことを言っている奴は世界中にいないでしょう。なぜ、そんなことをは
つきり言えるか。聖霊の、本願の力が来るから、言わざるを得ない、為さざるを得ない。

「それが終わるまでは死にません」

と。生きざるを得ない。みんな「ざるを得ない」。病気なんかすつ飛んじやう。病気がとつ
つかない。烈々たるものが来ているんです、正直。皆さんも、この福音を受けて、この集
会に来たら、そうでなかったら、つまらないよ。

●(結文) ひとえに親鸞一人がためなりけり

(第一四条) 一念に八十億劫おくじょうの重罪を滅すと信ずべしということ。

凄いね、これは。念仏のただ一念でもって八十億劫の重罪を消してしまう、というんだ。
それくらいな力を持っている。



一念発起^{ほつき}するとき、金剛^{こんごう}の信心をたまわりぬれば、
上から来るんだからね。私たちが「主さま！」と言うのは、
「主さま！」

と呼べば、もう呼ばない前に主の方では来ている。呼び方が悪いからじゃないんです、何も呼べなかったら、今度は逆に上からかかってくる。逆らっていたパウロがひっくり返されたでしょ。あれが本願の効力だからね、復活のキリストの。

(結文) ……聖人のつねの仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。

「弥陀の五劫思惟」とは、弥陀の非常に深いところの思いです。

「ひとえに親鸞一人がためなりけり」

この言葉です。それはただ親鸞一人のためだったと。この他力本願の大きな——こちらで言えば福音だね——大きなおとずれは、その内容は素晴らしいたくさんのもので深いものであるが、それは親鸞一人のためだったと。

「他力本願の驚くべき内容は親鸞一人のためであった。自分と如来との関係、一対一のこの関係は、ひとがどう思おうと、そんなことではない。ただ私のためだ。このしょうがない奴が救われるためだ。このしょうがない奴が本願の中に入るためだ。親鸞一人のためであった」

ということは、親鸞はどん底に立っているわけです。

「罪びとの首^{かしら}」

なんです。地獄は当然の所という人間だと。

「地獄は当然の所である人間のために、この他力本願の驚くべきおとずれがやって来たので、問題は私のためだった」

「福音は私のためだ、十字架は私のためだった、聖霊は私のためだった」と。一人びとりが本当にそのどん底に立っているか。

だから、

「私が第三の罪びとの首だ」

と言うのは——「三番目」というのは何も何番目だっていいけれども——「罪びとの首」というのは、

「私はこの親鸞やパウロと同じようにどん底に立たせられました。そうしたらエライことになりました」

ということですよ、あの詩の言葉は。いいですか、間違わないでください。

「そうか、先生はだいたい悪いことをしたらしいな」

なんて、そんなことではない。そんな相対的な問題ではない。

どん底に立って、もうしょうがない野郎だと。そうしたらば——或はゼロでもいい——



このゼロが無限大になる。ゼロで割られたら無限大になる。だから、パウロの、
「我は罪びとの首」
というのと同じで、

「弥陀の五劫思惟は親鸞のためだ」

という、この親鸞は正に「罪びとの首」です。どん底に立っている。極悪人だ、言葉はおかしいけれども。ところが、そのどん底に本当に立ったのはキリストなんだ。キリストが十字架でどん底に立って、

「お前たちの罪は全部引き受けた。過去・現在・未来の全部を引き受けた。何をゴタゴタしてるか」

と。もう、ただ全身で——口じゃないよ——全身で、

「有り難うございます！」

とひれ伏せば、聖霊はやってくる。それを体験するまでは——魂の世界はゴマかしがきかないからね——自分をまだエトバス（なにか）、サムシングと思っているうちは、ダメですよ。

「いや、私はまだこれだけのことができます」

と、何を言ってるか。太陽の光がなかったら、何が光ることができるか。相対的な光はみんな太陽の光のおかげでしょうが。こっちは無に等しいんだ、本当は。だから、どん底に立って、自分のエトバスなんてものは何も思わない。

「己自身を憎まずば、我が弟子となることができない」

と言ったのが、その世界です。自分自身を吐きすてるようにしているような、その世界に入ると、その人を本当に神さまは使いたもう。これが、私が今日言いたいところの一番大事なことなんです。

だから、本願の効力は全部、祈らせられている。祈らざるを得ない。力が来ざるを得ない。この「ざるを得ない」という世界と、この

「親鸞一人のためなりき」

という、その「親鸞一人のためなりき」を、

「ああ、そうですか、親鸞はそんなことを言いましたか」
じゃないです。

「私一人のためだ」

といって読まなければダメなんです。歎異抄を本当に読むのは、そこに来なければダメ。だから、これが歎異抄の一番、最後の所の一番大事な言葉です。

それでは、今日はそこまで。

